

# Career Cruising

キャリアとは「旅」である。人は誰もが人生という名の旅をする。人の数だけ旅があるが、いい旅には共通する「何か」がある。その「何か」を探すための旅に出よう。

## 出会い・決断力・努力 華やかなキャリアを成功へ導く

OL→芸者→フラワーデザイナー

花千代

インタビュー・文/大久保幸夫 写真/勝尾仁



花千代。本名斉藤由美子。職業フラワーデザイナー。Career Cruising 第1回はこの人のキャリアにフォーカスしたい。2007年6月にテレビ東京系の番組「ソロモン流」が彼女を取り上げ、同月彼女自身が「人生に奇跡を起こす幸運力」(大和出版)を上梓したので、メディアを通じてご承知の方も多いただろう。今を代表するフラワーデザイナーであり、そしてまたユニークなキャリアをお持ちの方である。

彼女はきわめて辛い10代を過ごした。両親の不仲、父親の浮気、母親の自殺未遂、そして失踪。親戚に預けられ、普通なら友達と無邪気に遊



はなちよ  
高校卒業後、OLを経て新橋花柳界にて芸者になる。1996年フランスへ語学留学、後にパリで花の勉強を始める。2000年4月帰国、フラワーデザイナーとして独立、アトリエ「花千代」を主宰する。恵比寿にブークギャラリー HANACHIYO をオープンさせ、現在は注文制作、ウエディング、贈答花の他、映画、テレビ、CMなどで活躍中。



んで過ごす年代を「自分には必要とされていけない」「愛される価値がない」という念を持ち、孤独な時間を送るのだ。しかし、そのときに出会った文学や芸の世界が、彼女に大きな影響を与える。永井荷風の『すみだ川・新橋夜話』や谷崎潤一郎の『陰翳礼賛』、小林秀雄全集である。

その後早く自立したいと、高校卒業と同時にOLになるが、雑誌で見た新橋の料亭の特集に刺激を受け、以前から関心のあった芸者の世界への思いを抑えきれず、20歳のとき芸者としての道を歩むようになる。




ここから花千代氏のキャリアの第1ステージである。

## 花柳界へ身一つ飛び込み 売れっ子の芸者へ

なんの伝手もない彼女は、老舗料亭金田中の女将に電話して、「花柳界に憧れていて、芸者になりたいんです」と伝える。見ず知らずの女性からの突然の電話に普通ならばまともに取り合わないだろうが、女将は彼女に会い、置屋にも紹介してくれる。厳しいしきたりの世界で、一から芸を学ぶのは並大抵のことではないが、辛かった少女時代を思えば、頑張れたという。「すべてのことは新橋学校（新橋の芸者時代のこと）で学んだ」と彼女はいうが、芸事、礼儀作法、客あしらい、政治からオ



## 花千代氏 年表

- 1963年 ● 横浜生まれ
- 1974年 両親が離婚、両親に捨てられ、祖母と暮らす（11歳）
- 1977年 茶道裏千家のてほどきを受ける
- 1979年 祖母が病に倒れ、高校生でひとり暮らしをする  
孤独を紛らすために和の分化や伝統芸能の世界に足を踏み入れる
- 1982年 高校卒業後、OLをする  
「東をどり」を見て花柳界へ強く関心をもつ 
- 1984年 永井荷風の『新橋夜話』に影響を受け、芸者になることを決意  
「千代田」という置き屋に住み込み、新橋の老舗料亭「金田中」で芸者デビュー
- 1993年 売れっ子芸者としてお座敷を掛け持ちする毎日
- 1996年 花柳界を引退し、語学留学のため渡仏  
パーティで招かれた邸宅のフラワー・アレンジメントに感銘を受け花の勉強をすることを決意しパリへ移住
- 1997年 「モニク・ゴーチェ」のサロンに通い始める  
難関といわれるフラワー・アレンジメントの国家試験（DAFA）を突破 
- 1998年 フランス園芸協会1級資格取得
- 1999年 2年のカリキュラムを終え、ディプロム（修了証）を取得  
パリの有名フローリスト「ピエール・デュクレール」にて研修を受け経験を積む
- 2000年 帰国。フラワーデザイナーとして独立し、アトリエ「花千代」を主宰
- 2002年 北海道の「ザ・ウィンザーホテル洞爺」のフラワーアートディレクターに就任し、ホテル全館のフラワーコーディネートを受け持つ。 
- 2002年 テレビCM「東レ・シルック」のフラワーデザインを担当
- 2002年 窪塚洋介主演映画「狂気の桜」のフラワーデザインを担当
- 2003年 生活空間と花の新しいスタイルを提案するショップ「ブーケギャラリー HANACHIYO」を白金にオープン
- 2005年 スティーヴン・セガール主演ハリウッド映画「イントゥ・ザ・サン」のフラワーデザインを担当  
その後さまざまなCM、テレビ、映画のフラワーデザインを担当する
- 2005年 ショップを白金から恵比寿に移転
- 2006年 ウェブサイト「BIGLOBEキレイ」にて、豊かな人生経験を生かして人生相談のコーナーを担当



芸者時代、銀座百点会のお座敷で旦那衆と

ペラまでの知識を身につけて、売れっ子芸者に上り詰める。そのまま芸者としてさらに高みを目指す道もあっただろう。だが惜しまれながらも、32歳のときにすっぱり芸者をやめてしまう。理由は「花柳界以外の世界を見てみたい」ということ。

そこからが花千代氏のキャリアの第2ステージである。

決めたのはフランスに行つて、フランス語を学ぶことだった。この意思決定はかなり突飛である。もっと若いときならばいざ知らず、芸者としての経験や人脈を生かせそうにない、しかも語学留学という学んだ先に何があるかわからない道を選んだのである。今まで築き上げてきた

自分の世界をゼロに戻すことは勇気が必要だったろう。しかし、芸者時代の成功経験の自信をもとに、芸者を志したときと同じ、先が見えないなかで全力疾走する人生を歩み始める。

### 出会いが転機のチャンス 第2のキャリアステージ

知人から紹介された女性の誕生日に、バラでデコレートされた屋敷を見て、彼女は新しい目標を持つ。それは「花一つで空間すべてを変えてしまうこと」である。花の勉強を本格化し、パリでフラワー・アレンジメントの国家試験にも合格。今度は帰国し、フラワー・アレンジメント

の会社を立ち上げる。ここでも彼女に大きな出会いが待ち受けているのだ。ザ・ウィンザーホテル洞爺のフラワーアート・ディレクターに抜擢されるのである。まさしく花一つで空間を変える仕事。その後は現在に至るまでフラワーデザイナーとしての活躍の領域を広げ続けている。

花千代という名前は、芸者名の「千代菊」と、花を組み合わせたもの。本来まったく違うはずのキャリアを融合すると、どこにもない新しいキャリアが見えてくる。彼女のキャリアは名が表わすように、芸者とフラワーデザイナーがひとつになつてオリジナルのキャリアを作り上げた事例と言えるのではないだろうか。

# 不確実な現実を直感と前向きな行動力で切り開くプロデューサー型タイプ

芸者としてのキャリアと、フラワーデザイナーとしてのキャリアとを成功に導いた花千代さんには、キャリアを成功に導く作法(考え方と行動の様式)があった。

大久保幸夫 (ワークス研究所 所長)

花千代さんのキャリアを見ていて、最初に浮かんだのはPositive Uncertainty (積極的不確実性)という言葉だ。これは意思決定理論の第1人者ジェラット (Eric Gelatt) が提唱した概念で、将来はどうなるかわからない不確実な状況を前向きに受け入れ、曖昧さと矛盾の中、直感的に意思決定することを推奨したものである。

芸者としてのキャリアのスタートを切ったときも、その次にフラワーデザイナーとしてのスタートを切ったときも、あまりにも見通しが立たず尻込みしかねない状態であった。しかし彼女は、ひとりで、かつ直感で、重要な意思決定をした。その後は、自分の直感が間違いでなかったことを立証するかの如く、人との出会いを大切に、そこから局面を打開していく。嫌なことはすぐ忘れ、いいことは増幅して前へ前へと進む。このパターンは1回目も2回目も全く同じだ。これは彼女が、見通しの立たないキャリアを成功に導く作法、つまり考え方や行動の様式を身につけたことを意味するの

ではないだろうか。

仮に全く別のことにこれからチャレンジしても、彼女は同じようなやり方で成功させるに違いない。このような作法はとても大きな財産である。書籍や人生相談のブログを通じて、花千代さんは積極的にそのプロセスを披露している。それは彼女が自身の持つ作法を若い人に教えてあげたいという思いではないだろうか。

## 二つの専門性を持ったプロデューサー型人材

さらに彼女のキャリアを見て気がつくのは、プロデューサー型・プロフェッショナルへの道を歩んでいることである。芸者で一人前になり、売れっ子になったところをやめた。そしてフラワーデザイナーとして今また売れっ子になっていった。つまり2つの専門性を身につけたわけで、典型的なプロデューサー型人材のプロセスを歩んでいるといえる。

創造的な活動を指揮するには、複数の専門性を持つことがよいと

される。物事を多面的に眺め、融合して考えることで、オリジナルが生まれるからだ。

花千代さんは現在、花をあしらった筆箭のデザイナーに取り組み、芸者の世界を一般に知ってもらうためのイベントにも着手している。それは、本人もまだ自覚していない、プロデューサー型キャリアの始まりを示唆しているのかもしれない。

